

小林聡幸 著

うつ病ダイバーシティ

松本卓也

精神病理学者の本というと、たとえば木村敏の『分裂病の現象学』や宮本忠雄の『妄想研究とその周辺』のように、弘文堂から上製・函入りで刊行された格調高い書物をイメージする人も多いだろう。『分裂病の現象学』は筑摩書房で文庫化もされたが、やはりあの「函から本を取り出す」という行為が重要であって、これから自分は精神病理学の本を紐解くのだぞ、と襟を正す手筈を踏むかどうかは読書体験にも少なからぬ影響を与える。たとえ函入りでなかったとしても、ソフトカバー（並製）ではいけない。硬い表紙のハードカバー（上製）でなければ「感じ」がでないのである。

本書は、著者が1996～2023年にかけて執筆したうつ病論をまとめた論文集である。同じ著者による統合失調症論集である『行為と幻覚』（金原出版）が刊行されたのは2011年のことであるから、ちょうどそれから干支が一回りしたことになる。『行為と幻覚』もソフトカバーであったが、本書『うつ病ダイバーシティ』はそれに加えて、収録されている精神病理学の論文をかなりユーモラスな筆致でリメイクしており、読みながら思わず何度も笑ってしまうようなつくりになっている。精神病理学の本で大笑いしたのは初めて、という体験をする読者も少なくないだろう。ちなみに、著者はもう1つの専門である音楽家の病跡学の本については2冊ともハードカバーで出しているけれども、やはり本格的な病跡学はまだまだハードカバーじゃないと「感じ」が出ないのかもしれない。

もっとも、見かけに反して、書かれてある内容は

本格的である（そもそも、元の論文はいずれも専門誌に出た精神病理学の論文である）。師である宮本忠雄の衣鉢を継いで、躁とうつの本態を混合状態に見定め、さらには妄想や焦燥や自己臭を現象学的・人間学的に捉える論述は、多くのことを教えてくれるだろう。しかも、この本のつくりである。いままで「お高くとまった」感じのする精神病理学を敬遠していた人々にも訴求し、あらたな読者を獲得することだろう。

けれども、やはり時代は変わってしまったのだ、という感覚を抱かざるをえない。いつの頃からか、精神病理学のハードカバーの本はほとんど出なく（売れなく？）なった。評者自身も含め、精神病理学の若手はどこかコミカルであり、どこかに「なんちゃって」感があることを隠すことができない。おそらく著者は、精神病理学が「本格派」ではありえなくなった時代に、一体何をなしえるのかをそのスタイルによって問うているのだろう。本書が精神病理学における「本流」であった統合失調症ではなくうつ病を対象としていること、しかもその「本質」ではなく「ダイバーシティ」をタイトルに掲げていることは、この学の置かれた状況と、その状況のなかでいかにして火をともし続けることができるのかという困難への応答なのである。

（京都大学大学院人間・環境学研究科/精神病理学）

●四六 362頁 2023年

定価：3,520円（本体3,200円＋税10%）

金原出版刊